

## 第IV章 考察

### 1. かわらけ・陶磁器—鎌倉出土品との比較を通じて—

押木 弘己

#### はじめに

今回の報告において、図化点数が瓦に次いで多かったのは、素焼きの土器皿「かわらけ」であった。資料個々の特徴については第Ⅲ章2（1）を参照されたいが、再実測時における筆者の観察所見として、第一に器形・胎土の特徴は鎌倉の出土品と非常に近似していることが指摘できる。鎌倉からの搬入品とまでは断言できないが、地理的距離を考えれば、その供給元が鎌倉と同じであったと考えることに支障はないようと思える。したがって、満願寺跡出土かわらけの特徴から読み取れる編年的位置付けには、鎌倉における先行研究の成果が適用できるものと考える。本論では、鎌倉のかわらけ編年を念頭に置きながら、これと対比させる形で満願寺出土かわらけの年代的位置付けを試みたい。なお、満願寺跡出土かわらけについては、形態的特徴から14世紀代という年代観が既に示されている〔中三川2015〕。

#### 鎌倉の「かわらけ」編年

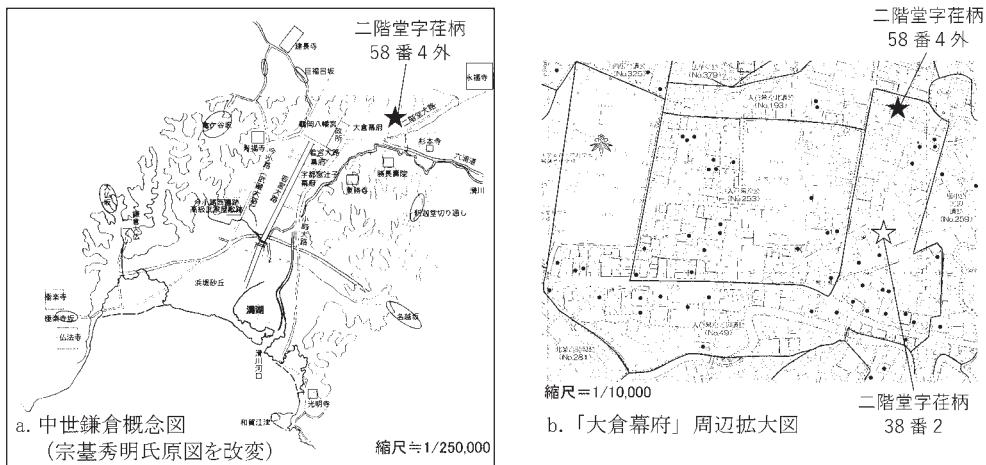
近年、鎌倉のかわらけ編年の研究史がまとめられた〔松吉2016〕。これまで、当地の第一線で遺跡調査・研究に携わってきた先学諸氏によって様々な編年案が示されてきたが、キーポイントに置かれる出土例は共通しており、土器型式の変遷自体は概ね共通認識が得られている。どちらかといえば型式学的検討が先行したため、形態的に特徴のある資料が重視される傾向が強く、結果的に層位や一括性への配慮を欠いていたという批判もある。とはいえ、伴出する陶磁器類の特徴を踏まえた編年であることは各成果とも共通しており、それは精緻な到達点を迎えており〔宗墓2019〕。同一地点における一括出土例を序列化した近年の成果〔鎌倉かわらけ研究会2016〕は、伴出陶磁器を含め数量分析も取り入れており客觀性を高めたが、層位・遺構間切り合いによる直接的な新旧関係は把握できず、あくまでも型式学による先行研究が土台にあった上での成果である。また、手づくねかわらけが消失した以降の、鎌倉後期～南北朝期の型式変化についてはカバーしておらず、研究上、同一手法によって後続するかわらけ編年を構築する必要性も生じた。

中世都市鎌倉において、武家政権が所在した期間に当たる鎌倉時代初期～南北朝・室町時代前期＝12世紀後葉～15世紀中葉の土地利用が連綿と見て取れる遺跡は、実をいうと非常に少ない。鎌倉時代初期の遺跡は頼朝御所や鶴岡八幡宮・永福寺などが置かれた大倉エリアに主体があり、若宮大路界隈→海浜部という順で都市域の拡大が鎌倉時代を通じて段階的に進み、南北朝期に入ると再び大倉エリアを中心とする散漫な土地利用へと後退することが、発掘成果の蓄積により確認されている。つまり、頼朝～足利公方の段階を通じた土地利用が広く確認できるのは大倉エリアのみということになり、そのなかでも、後世の削平を免れて層位的に土地利用の連續性を見出せる地点、とりわけ良質な出土品から遺物様相の変化を把握できる調査例はきわめて限られている。

以下、その希有な事例の一つ、大倉幕府周辺遺跡群・二階堂字荏柄58番4外地点〔原ほか2002〕の成果から中世鎌倉における遺物変遷を概観し、満願寺跡出土かわらけの参考としたい。

#### 大倉幕府周辺遺跡群（二階堂字荏柄58番4外）の遺物様相

第45図には、当該地点の位置を示した。a図からは、大倉幕府（頼朝御所）・鶴岡八幡宮・勝長寿院・永福寺など、頼朝期に建てられた幕府重要施設と至近にあることが分かる。b図の★が当該地点、☆は先述した一括出土例の検討対象となった字荏柄38番2地点である。双方、南北に約160m離れている。★地点に南接する市道は東方の永福寺に向かう「二階堂大路」の名残とされ、これに近い数地点で道路



第45図 鎌倉市大倉幕府周辺遺跡の位置

側溝と思しき大型溝も確認されている。

第46図が字荏柄58番4外地点の出土かわらけで、図面上方から上層出土＝新相かわらけの順で配列している。年代観は、報告書〔原ほか2002〕の所見に基づいている。かわらけと同一層から出土した陶磁器類については図示せず、説明文のみを掲げた。

鎌倉かわらけの編年では、手づくね製品の消失と、「薄手丸深」など内湾基調で大・中・小の三法量に分かれる期間の年代観が課題として残る。前者は13世紀代のどこまで下らせることが妥当なのか、後者については14世紀代をほぼ完全に含み込む現行の捉え方では長期間に過ぎないのか、という論点が検証を要しよう。特に後者について、鎌倉期から南北朝期という時代の転換期も内包するため、なぜ政治体制の変革期にかわらけ様相に大きな変化が生じなかったのか、その理由についても説明を尽くす必要があるように思う。

#### 満願寺遺跡出土かわらけとの比較

第43図に掲げた満願寺跡出土かわらけは小片が主体であるため、推定復元径に不確定要素は残るが、内湾で身深となる器形の資料が主体となり、これに外傾・外反器形の資料（8～10・14など）が少量加わることが指摘できる。鎌倉の例（第46図）に照らすと、前者はⅢ～Ⅳ期に、後者はⅣ期以降に位置付けることができる。後者については、8・9に「近世墓」出土との注記があることから、戦国時代～近世まで下る可能性も考えておきたい。

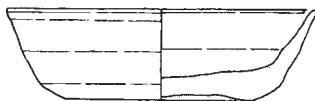
上述した比定年代の課題は残しつつも、鎌倉編年との比較の結果、満願寺遺跡出土かわらけは14世紀代に主体を置くのが妥当、というのが筆者の現状認識であり、先行研究〔中三川2015〕を追認する結果となった。満願寺の創建期とされる12世紀末～13世紀初頭とは年代的に大きな差があり、出土瓦より後出的様相が強い。14世紀以降の満願寺において、かわらけを用いた法会などが行われたことの微小な証跡といえるかもしれない。無論、トレーナー下層など境内の地下に、創建段階の土器・陶磁器が遺存している可能性は十分に想定できる。近隣の満願寺東横穴墓群では手づくねかわらけなど13世紀代と見なせる資料が出土しているというので、岩戸地区を広く見渡した考察も、今後の課題である〔中三川2015〕。

再三述べているように、満願寺遺跡出土かわらけの胎土には鎌倉出土のものと明確な差を見出すことができない。付表2でBとした胎土はⅡ期以降の鎌倉で最も多いもので、量産化＝大量需要にともない、鎌倉周辺の各所で採掘された粘土が十分に精選（水簸）されないまま使用されたと考えられる。今回は筆者の経験に基づく肉眼観察の所見に依拠したに過ぎないが、将来的に満願寺遺跡出土かわらけについて理化学的分析を施すことで、鎌倉との近似性（または相違点）、延いては生産の実態について一步

IV期（第1面上）14c末～15c代

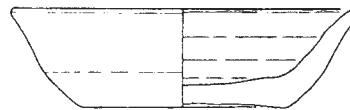


- ・口クロかわらけの・外反・厚手化が進行
- ・瓦質土器の火鉢・風炉が目立つように



- ・常滑甕は8型式まで

IV期（第1面下～第2面）14c末～15c代



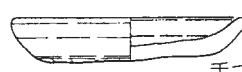
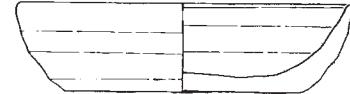
- ・かわらけは口クロ製品のみ、外反・厚手化する段階
- ・瀬戸窯製品の碗皿が存在感を増す→貿易陶磁器は減少傾向に

III～IV期（第2面下～第3面）14c前～末葉

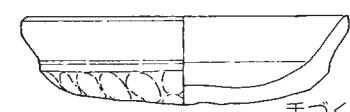


- ・手づくねかわらけが消失、かわらけは口クロ製品のみに
- ・龍泉窯系青磁の蓮弁文碗+坏Ⅲ類（細蓮弁文碗をともなう時期）
- ・白磁口禿碗・皿+口禿型押文皿
- ・常滑甕は6a型式まで

II～III期（第3面下～第4面）13c後葉



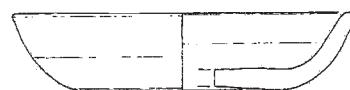
手づくね



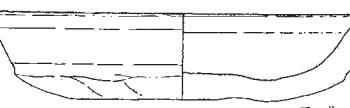
手づくね

- ・龍泉窯系青磁の幅広蓮弁文碗が出現、坏Ⅲ類の大型品（盤）も
- ・白磁口禿碗が出現

II期（第4面下～第5面）13c中～後葉



手づくね



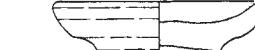
手づくね

- ・龍泉窯系青磁の劃花文碗・皿が主体、同安窯系は減少
- ・白磁・青白磁は小物類を中心に
- ・常滑甕は5型式まで

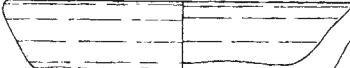
I～II期（第5面下～第6面）13c前～中葉



手づくね



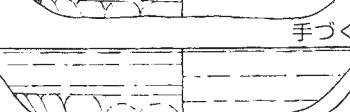
手づくね



手づくね

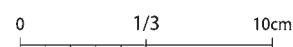


手づくね



手づくね

- ・龍泉窯系青磁の劃花文碗・皿が主体、同安窯系も定量
- ・白磁・青白磁も散見 碗・壺+小物類



第46図 鎌倉におけるかわらけ変遷の一例

(大倉幕府周辺遺跡・二階堂字荏柄 58番4外地点：原ほか 2002 を基に作成)

踏み込んだ検討に繋ぐことができるよう思う。膨大な量が消費された都市鎌倉のかわらけが、どのような生産・流通の過程を経てもたらされたのか。鎌倉を支えた生産領域や、流通・貢納体系などの問題にも通じる情報が、小さな土器片には含まれているかもしれない。

#### 陶磁器について

細片化した資料に限られ、全体器形を復元・図化できた資料は皆無であった。第Ⅲ章で述べたように14世紀以降の製品が主体を占めるなか、唯一渥美窯産の短頸壺（第43図33）は鎌倉時代の前半以前に遡る可能性をもつ。渥美窯における壺・甕類の生産は13世紀前葉頃までには終焉するようで、鎌倉での出土状況も、概ねこれを裏付ける内容となっている。よって当資料については満願寺の創建に近い生産年代を想定して良いだろう。

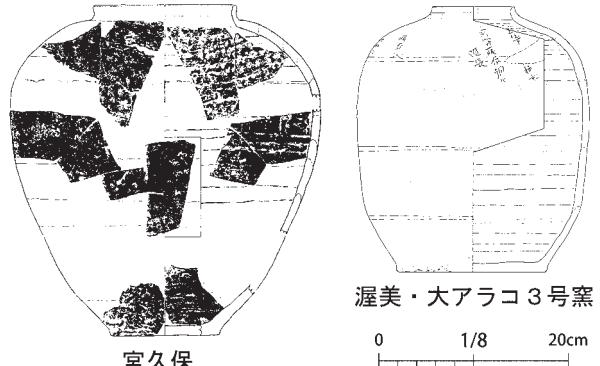
筆者自身、鎌倉において渥美窯産の短頸壺に直に接した経験がないので正確な評価は難しい。比較対象として的確ではないかもしれないが、神奈川県下では綾瀬市の宮久保遺跡で「藤原」銘の渥美窯短頸壺が出土している（第47図左）。右図は渥美の大アラコ3号窯の出土品で〔安井2012〕、焼成前の刻銘から藤原頼長が三河守に在任していた12世紀中葉の作とされる。宮久保の短頸壺も同様の作例と考えられ、渋谷氏関連の居館跡とも推定される同遺跡の建物群が、この頃まで遡る根拠とされている〔國平1988〕。

細片であり口頸部の屈曲具合も異なる満願寺跡の短頸壺であるが、満願寺の時代的特性を考える上で貴重な情報を含んでいるように思える。

以上、雑駁な論述に終始したが、かわらけ・陶磁器について鎌倉の視点からコメントを付した。今後も研究が進展することを期待して、結びとしたい。

#### 【参考文献】（第Ⅲ章2（1）と共に）

- 國平健三 1988 「綾瀬市宮久保遺跡出土の中世遺物について—「藤原」銘短頸壺との遺物群構成—」『東國土器研究』第1号 東國土器研究会
- 横須賀市教育委員会 1992 『岩戸満願寺』 横須賀市文化財調査報告書第25集
- 原 廣志ほか 2002 『大倉幕府周辺遺跡』『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書18（第1分冊）』鎌倉市教育委員会
- 安井俊則 2012 「第2章第1節15 大アラコ古窯跡（田原市）」『愛知県史 別編窯業3 中世・近世常滑系』 愛知県
- 中三川 昇 2015 「三浦半島東岸中部の古代末～中世初期遺跡群について—三浦氏本貫地とその周辺地域における遺跡群の様相—」『考古論叢神奈河』 第21集 神奈川県考古学会
- 鎌倉かわらけ研究会 2016 『鎌倉かわらけの再検討—大倉幕府周辺遺跡の一括資料の分析から—』 鎌倉かわらけ研究会・科学技術費補助金「平泉研究の史料学的再構築」
- 松吉里永子 2016 「鎌倉かわらけ研究史」『鎌倉かわらけの再検討』（上掲書）
- 宗碁秀明 2019 「鎌倉出土かわらけの系譜と編年—東国社会の変質と中世の成立（後）：かわらけの編年と中世社会」『鶴見大学紀要』第56号 第4部 人文・社会・自然科学編 鶴見大学



第47図 渥美窯産短頸壺の事例

（左：國平1988、右：安井2012より転載）